

山県大弐の経済論について

Gudrun GRÄWE

はじめに

このタイトルは誤解を招きやすいかも知れない。山県大弐(1725-67)は狭い意味での経済思想家ではない。彼の場合、経済論について語るのはやや大袈裟に聞こえるかもしれないが、ここでは「論」を見解という意味で使いたいと思う。

大弐は本居宣長や荻生徂徠のように傑出した特異な思想家ではないと思われる。確かに、大弐は有名な思想家たちと違って、独創的、体系的な思想を編みださなかった。独自の経済理論をも生み出さなかったことはいうまでもない。むしろ彼は当時話題になった思想家たちから様々な内容を受け入れ、自分の考え方や目的に相応しい要素を選び取って、自分の思想を構築したのである。もっと詳しく言えば、大弐の思想内容は山崎闇斎(1618-82)による闇斎派朱子学につながる側面を持つ一方、その思想には徂徠学と共通するところも多い。いわば、形而上学的、倫理的な傾向の強い闇斎朱子学と古代中国を理想とする実践政治的な方向へ向かっている徂徠学とが、同時に、大弐の思想に流れ込んだと言えよう。このような意味では、大弐の折衷的な考えは様々な要素を結合させているだけにかえてそこに当時の一般的な経済観を、徂徠の体系的な独特の思想以上に、はっきりと読み取ることができる。

山県大弐の学問分野は広く、朱子学、徂徠学以外に医学、天文学、兵学などに及んだが、その最も知られている著作は『柳子新論』(1759年)である。『柳子新論』の中で大弐は徳川幕府支配下の社会、経済、政治的諸条件を厳しく非難し、さらに、自らの尊王論を唱えた。そのために、大弐は幕府から危険視され、いわゆる明和事件(明和四年、1767年)で、死刑に処せられた。

筆者は別稿で山県大弐の社会観について述べたが¹⁾、この論文では、彼の経済論について考察したいと思う。大弐は当時の経済状況をどのように訴えたか、また、彼の改良の提案の中に、どのような経済論が表されているかという問題について検討したい。具体的に言えば、中国の儒学思想・伝統文化と関連を持つ近世日本の儒学思想を念頭におきながら、大弐の思考の中の経済に関する儒学的概念や発想を明かにしたい。例えば、儒教文化の現象である商業の蔑視はどのような形で現われているかなどである。さらに、出来る限り当時のヨーロッパの経済思想との比較を試みたい。大弐の同時代者である19世紀の自由主義時代に、世界諸国の経済政策の基調となったイギリスの経済学者アダム・スミス(1723-1790)の『国富論』との比較も考えられる。しかし対照を強調する比較だけではなく、場合によっては共通点についても触れたい。例えば生産の源泉と

しての農業を重視したフランスの経済学者フランソワ・ケネー（1694-1774）の思想は大武のそれと共通するところがあるように思われる。

このように、日本の経済思想は諸外国の経済思想とは異なっているという視点を放棄したい。さらに、江戸時代の経済思想をヨーロッパの経済学の尺度で評価するのは無意味であると思うので、日本の経済発展に関して、資本主義化とか近代化などという西洋風の誤解を招きやすい概念を使うことは避けたい。経済思想という言葉は川口浩にならって「経済事象に関わる観念」、つまりそれに関する思想という意味で用いたい。²⁾したがって、大武の経済に関する思考をそのものとして考察したい。

敢えていえば、大武の思想は高度に理論的などというより、現実の状況に密着したものであると思う。さらに、彼の思想は現実の経済に影響を与えたというより、現実の状態が生み出した思考であるかも知れない。だとすれば、そこに現代とのつながりを見付けるのは困難であろうし、今日の視点から見て、大武の経済論を検証すれば、何か新しい認識が得られるかという、いささか疑問である。筆者の目的は、経済思想に寄与するより、歴史的あるいはフィロロギー上の意味での大武の経済思想の紹介である。

大武の主著『柳子新論』に、彼の経済思想が表現されている。その13篇の内、特に最後の4篇（守業第十、通貨第十一、利害第十二、富強第十三）が広い意味での経済諸問題をテーマにしている。本稿では主にその4篇を解釈学的に検討したい。

1. これまでの研究

山県大武についての研究を大雑把にまとめようと思うが、その際、戦前のものは省くことにする。また、広い意味で大武の経済に関する思惟についての研究のみを考慮に入れることにする。

丸山眞男は『日本政治思想史研究』において、大武と荻生徂徠との共通点を指摘するが、大武の社会経済的次元についてはあまり述べていない。³⁾丸山によると、徂徠は朱子学の、倫理的規準、すなわち社会経済的制度や現存の社会的な身分秩序は自然という力によって決められているから、人間はそれに手を出して変えることができないという説を採らない。その代わりに、聖人であった古代中国の先王たちは行政のために、「礼楽」という形のこのような規準を創出した。徂徠は、この先王の規準が日本では荒廃したので、幕府の権威者は当時の必要性に対応できる新しい秩序を創出する必要があると強調する。丸山眞男が述べるところでは、大武はその主体的「秩序作為論」を引き継いでいるが、それを幕府にではなく、朝廷に適用する。なぜなら、昔の理想的な状態を回復すべきものは幕府ではなく、天皇の権威であるからである。

大武の批判は安藤昌益のように封建社会構成自体にまでは及ばなかった、と丸山は指摘した。「大武は徂徠と同じく、現実の社会的矛盾の窮極的解決として制度の確立を説き、その制度の内容に於ても、貴賤の身分的差別を嚴重にし、商業資本を抑圧し、土着を奨励し戸籍を設ける等、殆どそのまま徂徠を踏襲した」⁴⁾。

丸山眞男と違って、特に経済思想の観点から大武の思想を取り上げたのが歴史学者林基である。彼はオーソドックスなマルクス主義の立場から分析を行なう。「山県大武は豪農の出身であった。

そうだとすれば彼らが当時の地主・ブルジョア的要素の一部を代表していたと見ることが一応許されるであろう」と、林は述べる。彼は大弐の「尊王」思想は目的ではなくて、手段にすぎなかったし、さらに、大弐は本当に農民と連帯感があって、結局蜂起計画まで立てたということにも疑念を持った。これはそれまでの大弐研究と全く違う意見である。大弐は農民のために戦うのではなく、彼の目的はむしろマルクス主義の意味での革命であった。林によると、大弐は封建社会の特徴である民衆の搾取を終わらせてから、歴史の次の段階、つまり資本主義を取るブルジョア的な民主主義を狙ったというのである。

もう一人の学者、市井三郎は科学的ないし通俗科学的な諸著作の中で山県大弐という人物を理想化した。明治維新の先駆者として、大弐は封建身分社会を否定し、庶民の対等を唱えたと市井は強調した⁶⁾。

外国の近世日本思想史の研究者として、大弐を単に紹介するのではなく、論文のテーマとして取り上げたのはナジタ・テツオ唯一人しかいない。大弐は現代風のナショナリズムの代表者として、過去500年の日本歴史の変遷に対して不満を抱いたため、復古による歴史の修正を望んだ、とナジタは強調する。彼によると、社会の状態を改善するために、当時の政治制度を暴力的手段で崩壊させるという論理はナショナリズム的な特徴であり、大弐の尊王思想も論争の手段に過ぎなかった、というわけである。

近年になって、アメリカの歴史学者 B. T. ワカバヤシが山県大弐と『柳子新論』に関する著作の中で、大弐の朝廷に対する忠誠を新しく解釈している。ワカバヤシによると、幕府を厳しく批判したとはいえ、大弐は武士の権力を終わらせて、朝廷の権力を修復しようとする革命主義者でも復古主義者でもない。大弐は徂徠派の影響を受けて、むしろ社会経済的差別や伝統的な社会階級制度の維持を唱えたというワカバヤシの見解は丸山眞男の説に近い。しかし、ワカバヤシは新しい主張も打ちだしている。つまり、朝廷は永遠に治め続けるが、天皇は政権を担当する能力がないので、古代中国の例にならって、忠実な大臣、すなわち將軍や大名に権限をゆだねるべきであるという考えが『柳子新論』には含まれているというのである。それらの大臣はまた、「柳子」のような学者から助言を受けるべきであるとされている。ワカバヤシによると、大弐の思想の主たる歴史的な意味は幕府に対する批判でも復古という目的にでもなく、彼の忠誠が藤原氏によって初めて行われた摂政・関白政治制度の伝統に根ざしているところにある。慈円の史書『愚管抄』と北畠親房の『神皇正統記』の中に、このような代表者としての天皇のために行使される大臣の自治権が叙述されている。

2. 歴史的な前提

当時の歴史的な背景をまとめて言えば、徳川幕府にとって、理論的にも実際にも最も解決しがたい課題は経済的な問題であった。鎖国時代の初めから、農業と商業の間の争いは激しかった。それは外国との貿易や商業の分化の相当な制限によって、さらに厳しくなった。徳川政治の中で、行政官が目指すべき模範と実際上の状況との間の矛盾は経済の分野において最も大きかったのである。理想的な経済状況は16世紀の大名の経験と17世紀の新しい儒学的な認識に基づくものであ

った。それは商業を最低限に限る、初歩的な農業経済であった。そして、理想的な社会とは次のようなものであった。武士は統治し、農民は生産し、商人は製品の分配者の機能を果たす。しかし、早くも江戸時代の中期から、その理想像はもはや維持できなくなった。新しい都市の町民の活動による商業や手工業の生産の増大は考え方の刷新を求めた。いわゆる「貴穀賤金」の思想はアナクロニズムであった。さらに、土地から離れた武士は大名の城下町に集中した。荻生徂徠によると、このような生き方をすることによって、武士は「旅宿ノ境界」にあるということである。つまり、彼らは旅宿に住んでいるような生活を送っている。

今ノ世ノ有様ヲ考ルニ、百千万般ノ患ハ皆御城下二人ノ聚リスギタル処ニ帰スル也、諸大名諸旗本皆御城下ニ聚リ居レバ、皆旅宿ノ境界也、旅宿ノ境界ハ物ヲ買調ヘネバ朝夕ヲモ暮ス事成ヌ物故、旅ニテハ兎角金ナリ、開闢以来ノ世々ニ只此百年ノ間バカリ、金ナクテハ叶ハヌ世界也⁹⁾。

「旅宿ノ境界」にあるというのは、すべてのものをお金で買わなければならないということの意味している。ところが、徂徠が考えている理想的な社会では、全ての人が「土着」しているのである¹⁰⁾。

このような、商業と産業を犠牲にして農業だけを振興する幕府の経済政策の弱点はすぐには明かにならなかった。江戸時代の最初の百年間、農耕の拡大は経済成長をもたらした。新しい開拓地が耕作可能となった。1597年に耕作地は1850万石と査定されたが、1700年には2580石まで増大した。穀物の生産は1600年から1730年までの間にほぼ倍増したと思われる¹¹⁾。多くの農産物は商業のために生産された。

しかし、1720年以降、農業に関する問題が増大した。その一つは、マルサスの唱えた人口と食糧との関係に関する理論のように、人口が耕作地の増加に対応して増えたことである。さらに、旱魃や凶作が食糧難を引き起こした。山県大武の存命中の凶作の年は1732年、1783/84年、1787年であった。

農民の苦悩や不満は多数の百姓一揆のもととなった、1700年以後は大衆抗議が増加した。農民はしばしば大名の城を攻めて、税金の上昇や新しい公課を非難した。18世紀に入ると、抗議は段々暴力的な武装蜂起になった。百姓の不満の原因は悪行政や幕府による税金の搾取だけではない。要因は様々であった。例えば村の経済の商業化による富や特権の不平等な分配が緊張を引き起こした。村の小作地が増加し、貧富の差が激しくなった。幕府の法律が米作田などの売却や分割を禁止したにもかかわらず、土地は村民のほんのひとにぎりの裕福層のものになった。土地の譲渡は小作地としてカムフラージュされた。幕府が課税するのは個人ではなく村全体であったので、土地所有者の変更について干渉されることもなかった。公の補助金で開発された新しい耕作地の買い取りは合法的になった。

このように、村では二階級の社会が発生した。つまり、金貸し、商業、酒醸造などの副業を持つ余裕のある少数の裕福な農民と、他方では大多数の小農や所有地をもたない、大農のために働く賃金労働者である。このような状況の中では、農業の発達や富の増加が見られた一方で、農民の一揆が起ったのも不思議ではない。

江戸時代には生活水準が向上した。住まいや衣服などだけではなく、教育や娯楽の状況もよく

なった。それと合わせて、商業も拡大し、貨幣経済も急速に広がった。江戸時代の終わりまで、商業を軽蔑する公認の理論は、至る所で行われた実践と矛盾していた。実際には、経済のための商業の必要性は認められていた。

大弐の人生の最初の20年は、八代将軍徳川吉宗と同時代であった。その前任者達の財政の乱れで、幕府の経済状態は悪くなってきており、吉宗は農業や商業にわたる改革を行った。それが幕藩体制の安定強化のために行なった享保の改革であった。例えば1721年に、吉宗は商業の支配のために「株仲間」という幕府の許可した独占的な商工業者の同業組合を認可しはじめた。その目的は物価の安定や商業物資の十分な分配を保障することであった。吉宗はある程度幕府の支配体制の補強に成功したが、庶民にかかわる基本的な経済問題は解決できなかったため、庶民の生活はさらに苦しくなった。このような社会・経済的な条件のもとで、大弐の幕府に対する批判的態度が生まれたと思われる。

3. 江戸時代の経済思想

この時期の経済思想の全体を概観するのはこの小論の範囲を超えているが、山県大弐の経済論をより明確に浮き彫りにするために、幾つかの観点を指摘しておきたい。

「経済」という用語は「経国済民」または「経世済民」の略である。それは国または世の中を治め、人民の苦しみを救う、つまり政治ということである。これが日本における「経済」の本来の解釈であって、20世紀まで日本の思想家の姿勢に影響を与えた¹²⁾。このように「経済」という概念はすでに江戸時代に存在したが、現代日本語のエコノミーという意味での「経済」とは全く違う。こちらは「人間の共同生活の基礎をなす物質的財貨の生産・分配・消費の行為・過程、並びにそれを通じて形成される人と人との社会関係の総体¹³⁾」であるが、日本語の本来の意味の「経済」は、有徳の君主を手本にする儒教の道徳に基づいた、法や倫理や正義を含む哲学的なシステムであった。そのために例えば経済を道徳に先行させたり、徂徠の弟子であった太宰春台(1680-1747)の『経済録』に処罰や教育、地理学についての章があったりするの驚くにはあたらない。経済には道徳的次元と政治的次元があって、社会のさまざまな側面に関わっていた。

1729年に出版された『経済録』の冒頭で、春台は「経済」ということばの語源について、次のように考察する。

凡天下国家を治むるを経済と云、世を経め民を済ふと云ふ義也、経は経綸也、(中略)経綸とは、絲を治むるを云、布の縦を経と云ひ、横を緯と云、工女絹布を織るに、先ず経の絲を治て、(中略)綸は絲をよる也、又経は経営也、(中略)宮室を造営するに、初に其事の全体をつもりて処分するを、経と云也、済は済度の義なり、わたると読み、わたすと読む、川を渡りて向の岸に到るを済と云、(中略)又救済の義也、すくふと読む、人の苦みを救也、又成也と註す、事の成就するを云、此数の義あれども、帰する所は一致也、畢境事を治て、其事の成就する意なり¹⁴⁾。

江戸時代とほぼ同じ時期に、ヨーロッパでは経済学は独立した一分野として出発した。ヨーロ

ッパの経済思想は蘭学を通して日本の思想家にある程度知れわたったが、しかし西洋の哲学や政治・経済思想の流布は厳しいコントロールによって不可能であった。外国との貿易と同じく、思想の交換は非常に制限された。しかし、ヨーロッパと日本の思想家たちの「経済」の理解は異なっていたにもかかわらず、彼らの構想は驚くほど酷似している。例えばケネーやスミスは日本の経済思想家と同じく、商業の拡大、分業の複雑化や価格の変動を論じた。もちろん、互いの影響があったかどうか、どの程度あったかという問いに答えることはできないが、オーストラリアの経済史学者モーリス・鈴木は非常に興味深いことを指摘している。つまり、歴史学者の間ではほとんど無視されているが、儒学は西洋の経済学に影響を及ぼしたというのである。ちょうど西洋で中国文化に対する興味が高まった時期に、フランスのケネーなどの重農主義者が自分の理念をまとめた。重農主義者の国家に関する見解には、朱子学派儒学による全てのもの、社会体制や人間などの根底の本性である「理」という原理が反映されている。「経済社会には〈理〉が内在する、すなわち自然の調和と自動調節の秩序というものが内在するという考え方を象徴するのは統治者であり、よき統治者は〈理〉の発現を妨害しないようにすべきなのであるが、そのような考え方は、ケネー（中略）を経由してアダム・スミスの経済学へと伝えられていた」¹⁵⁾。

江戸時代前期に、陽明学者である熊沢蕃山(1619-91)は経済問題を取り上げた。彼の理論によると、農業は経済の基礎で、つまり富の源泉である。それは「貴穀賤金」という思想に近いのである。その考えはある意味ではフランスの重農主義者とよく類似している。重農主義者と同じく、蕃山は農業に対する重税を軽減すべきであると強調した。彼によると、税金が軽くなれば、農民の生産意欲がいっそう高まり、富の源泉である穀物があふれる。ケネーも似たような考えを表現したが、彼の場合、それは「経済全体の相互関連性を分析する」¹⁶⁾までに及んだが、蕃山の考えはこの方向へ向かわず、郷愁の方向への後退に止まった。

ロマンチックな「母なる大地に帰れ」というスローガンが当てはまりそうな蕃山の考えによると、奢侈と貧困の原因は貨幣経済の拡大にあって、国の経済的諸問題を解決するためには、経済体制を根本的に改新すべきであるとされる。つまり、武士は農民と並んで、農村から分離せずに土着した生活を送るべきである。さらに、貨幣経済を中止して、以前のように、米が価値の主たる基準や交換手段になる体制に戻るべきであると唱えた。彼によると、士の困窮や民の餓えることに、

此そのより来る所余多ありといへども、其大本三あり。一には、大都・小都共に河海の通路よき地に都するとき、驕奢日々に長じてふせぎがたし。商人富て士貧しくなるものなり。二には、粟を以て諸物にかふる事次第にうすくなり、金銀錢を用ること専なる時は、諸色次第に高直に成て、天下の金銀商人の手にわたり、大身・小身共に用不足するものなり。三には、当然の式なき時は、事しげく物多くなるもの也。士は禄米を金銀錢にかへて諸物をかふ。米粟下直にして諸物高直なる時は用足ず。(中略)士困ずれば民にとること倍す。(中略)士・民困窮する時は、工・商の者粟にかふべき所を失ふ。ただ大商のみますます富有になれり。¹⁷⁾

蕃山は経済システムの崩壊の原因を見抜いたが、しかし彼が提案した解決策には現実性はあまりない。特に「善政は粟を本にして他の万物に交換するものである」¹⁸⁾というような貨幣経済の放

棄を提唱するのは時代遅れであると思われる。

次に、大弐の思想に最も影響を与えた荻生徂徠の経済についての考え方を手短かに述べたい。徂徠の経済諸問題に対する取り組み方は彼の思想のそれ以外の側面ほど独創性がないが、蕃山の重農主義を受け継いで、貨幣経済についての議論には貢献した¹⁹⁾。川口浩は徂徠の経済思想を六つの分野に分ける。(1)「士農工商之四民」のいずれもがそれぞれのあるべき姿を持って存在しているという、政府・農業・工業・商業から成る社会経済構造の洞察。(2)時間的にも空間的にも、江戸時代の現実社会は「風俗」や「上下」の紊乱によって、「聖人」の理想的な社会から社会的・経済的に離れている。その原因の一つは自己の利潤を追求する商人によって象徴される市場経済や利害対立の展開である、という当時の経済状況の把握。(3)このような事態は忌避すべきであるとはしながらも、徂徠は経済が人間性・人間行動・社会秩序・歴史動向を規定するものであることを認識していた。(4)為政者が社会総体の経済運行に対して政治責任を負うという認識。(5)この経済問題を新しく発動した幕府の権力によって解決しようとする姿勢。(6)施政の過程で、ある程度犠牲者が出るのは止むを得ず、特に商人が犠牲になるのを当然視するという抑商政策の容認²⁰⁾。徂徠は自分の著作で、二つの悪を繰り返し非難する。経済的・政治的混乱をひき起こしたのは第一に、礼法の衰退、第二に、武士が「旅宿の境界」におかれていることである。徂徠にとって、礼法は「所を知る」ということを意味する。各人は社会秩序の中で、社会的地位を持ち、その地位に相応しく行動すべきであるが、当時はそれが失われているというのである。「旅宿の境界」(上記参照)という表現は武士の、つまり支配階級の都会化・商業化の生活状況を物語っている。

蕃山と同じく、徂徠は武士の農村への復帰・土着を唱える。『政談』では次のように語る。

古ノ聖人ノ法ノ大綱ハ、上下万民ヲ皆土ニ在着ケテ、其上ニ礼法ノ制度ヲ立ルコト、是治ノ大綱也。当時ハ此二色欠タル所ヨリ、上下困窮シ、種々ノ悪事モ出ル也。(中略)上下皆旅宿ノ境界ナル所、聖人ノ治メニ上下万民ヲ土ニ在ツケルト、不在著ト表裏ノ相違也。一切ノコトニ無制度、衣服ヨリ家居・器物迄貴賤ノ階級ナキ故、奢ヲ押ユル規則モナシ。是聖人ノ礼法・制度ヲ立タルト亦表裏ノ相違也。²¹⁾

しかし蕃山の意見と異なる一つの重要な点がある。すなわち、徂徠は交換手段としての米穀制には必ずしも賛成していない。その代わりに貨幣の使用を容認するが、貨幣の影響力を制限するために、その支出を減少させることと現物による税金や年貢の納入を拡大することを提言する²²⁾。経済的機能を分析したこの貨幣経済に対するアプローチによって、徂徠は蕃山より正確に、徳川経済の実態を把握しえた。

徂徠は経済問題の考察に際して、道徳的な観点を最も重視したが、彼の同時代人であり朱子学者・政治家であった、六代将軍家宣を補佐した新井白石(1657-1725)は儒学の聖人の著作によりどこを求めたのではなく、経済問題に関する情報を直接分析し、問題に対処しようとした。彼は農業を富の源泉として提唱するのではなく、むしろ貨幣経済に賛同し、貴金属の重要性を強調した。白石が取り組んだ最も重要な問題の一つは外国貿易であった。『西洋紀聞』(1715年)の中で、日本は西洋の諸国から学ぶべきことが多いことを論証するが、輸入超過により、量的に限られた貴金属が流出しすぎるので、外国貿易を縮小するという対応策を勧める²³⁾。そこにはある程度

の矛盾が含まれていると考えられる。もう一つ白石の経済思想の興味深い所は貨幣数量説である。一般的に、インフレの原因は元禄貨幣の低品質にあるという意見があったが、それと対照的に彼は貨幣量の変化が物価を変化させると考えた。『白石建議』の中で、彼は次のように指摘した。

凡そ物の価重く候事は貨の価軽きにより候て貨の価軽くなり候事は其数多きが故に候へば法を以て其貨を取めて其数を減じ又物の価軽く候事は貨の価重きにより候て貨の価重くなり候事は其数少きか故に候へば法を以て其貨を出して其数を増し貨と物とに軽重なきごとくに其価を平かにし候時は天下の財用ゆたかに通じ行はれ候²⁴⁾

つまり、貨幣の流通量が多ければ、その価値は低く、物価が高い。貨幣の流通量を減らせば、物価が下がり、貨幣の価値が上がる。その時に法を用いて貨幣の流通量を増加させればよい。そうすれば物と貨幣の価値はバランスがとれ天下の財用は豊かに流通するようになるというのである。

白石は將軍家宣の顧問として自分の理論を実践することになり、自分が提案した貨幣の改鋳も1714年に行なわれたが²⁵⁾、それは期待されたような貨幣と物の均衡（「其価を平かに」）や「天下の財用ゆたかに通じ行はれ」ることにはつながらなかった。何故かという、幕府の財政政策には十分な知識が備わっていなかったからである。さらに、改鋳された新しい通貨と並んで、低品質の元禄貨幣もひきつづき流通し、それらの種々の貨幣の間の交換比率を規制する努力も失敗に終わった²⁶⁾。

徂徠によると、貨幣の改鋳はインフレの道徳的・社会的原因を克服できなかったために成功しなかった。物価が高くなる理由は、元禄貨幣の改鋳の時に金貨には銀を、銀貨には銅を割り増して、それぞれの純金・銀含有率を低下させたからではないと強調した。

諸色ノ高直ニナル子細ハ、元禄ノ時金銀ニ歩ヲ入テ、金銀ノ位悪クナル故に高直ニナルニモ非ズ。亦金銀ノ員数フヘタル故ニ高直ニ成ニモ非ズ。元来旅宿ノ境界ニ、無制度故、世界ノ商人盛ニナルヨリ事起テ、様々ノコトヲ取雜ゼテ、次第々々ニ物ノ直段高クナリタル上ニ、元禄ニ金銀フヘタルヨリ、人々奢リ益盛ニナリ²⁷⁾。

むしろ、道徳的な崩壊が高い物価の原因であると徂徠は批判する。この意見は多少時代遅れであると思われるが、貨幣的な視点にしか集中しない白石と異なって、徂徠は物価が多方面の原因によって決定されるというようにより広く問題や関連を観察する。

貨幣経済を経済成長の正当な付随現象として論じた太宰春台は『経済録』の中で、徂徠の物価論をさらに発展させ、通貨・インフレ・様々な種類の貨幣の間の交換比率の変動などという問題とも取り組んだ。武士が俸禄米を売却することについて、春台は次のように考察する。

只士人は米を売て金を取り金を以て銭を買ひ、銭を以て万物の用を弁ずる故に、金賤く銭貴ければ用足らず、商賈の銭賤くても利を不失者と同じからず、されば今の政は、銭を豊饒にして、価を賤くするにしくはなし²⁸⁾。

白石と同じく、春台も銭の増加によって物価が低くなると考えている。なお徂徠・蕃山と同じく、彼も経済政策の重要な目的として武士階級の保護に着手する。しかし春台は多くの先行者や同時代人たちと異なって農業と同じく商業を経済の基本的要素として認める。『経済録』の巻第五

「食貨」には「食貨は、上天子より下庶民まで、天下の人の治生の道を云也²⁹⁾」と、食料品と同じく貨幣は重要であると強調されている。ところが驚いたことに、春台の「農を本業といひ、工商賈を末業といふ」のような言葉は、春台が商人について良いイメージを持っていないことを証明している。または「当代には（中略）工商の輩日々数多くなり、在々所々に徧満して、人の用を弁ずるは便利なる様なれども、人の侈心を引起し、金銀の貨悉く賈人の蔵に納まる、歎かしきことに非ずや³⁰⁾」などには、商人が増加すれば、人民には害を及ぼすという考えが読み取れる。

まとめて言えば、蕃山は貨幣経済と商業を忌避した。徂徠は同じく商業活動を嫌悪したが限定的な貨幣経済を認めた。白石は現実的に商業と貨幣経済を分析した。春台は貨幣経済を認めたが、商人の利潤追求は受け入れなかった。この四人とも儒学に影響を受けた武士階級の学者であったので、農業を高く評価しながらも武士階級の生活水準を最終的に低下させる商人階級を寄生虫として多少憎むのは異常ではない。しかし儒学の典型的な「貴穀賤金」理念は実際の問題と取り組まずにはいられない思想家たちにとって堅持しにくくなったので貨幣経済は段々認められる方向へ向かった。

これと対照的に、商人階級の思想家たちも経済活動を論じた。ここでは三人を取り上げる。商家生まれで道徳論を中心にした伊藤仁斎（1627-1705）、同じく商家の西川如見（1648-1724）及び、農家に生まれ、京都の商家に奉公した石田梅岩（1685-1744）³¹⁾である。仁斎によると、商人は流通に従事することによって、「道」すなわち「仁」を実現する。言い換えれば、商人を含む農工商という三民のなすべき道徳的实践は、経済活動という形態を取る。彼にとって、その経済活動は賤業ではなく、道徳上の実践行為でもある、つまり道徳が経済を前面に押し出す作用を果たしているというのである。³²⁾

如見の経済思想は主に、彼が商人としての現実の生活の経験に起因するとみなされるべきである。商人は士農工と並んで、いずれも社会の存立にとって必要不可欠であり、相互依存的な社会的分業関係を成しているという。如見は商人の働きが如何に社会に役立つかについて、次のように説いている。「都て物の多少高下を量、損益を考へて高利をとる事なく、有所の物を以てなき所の物にかへ、我国の物を持て人の国の物にかへて、天下の財物を通じ国家の用を達するを、真の商人とはいふなり³³⁾」。興味深いのは、彼が「我国の物を持て人の国の物にかへ」ということばで外国貿易に賛同していると思われることである。

元禄時代には都市や商業の成長が商業倫理を生み出した。その最も重要な、町人の倫理に最も影響を及ぼした代表者は梅岩であったと考えられる。³⁴⁾彼が主に商人階級に教えた「心学」は折衷主義的な宗教的信念でもあり、商人の知的・精神的欲求に適合する倫理体系でもあった。多くの儒学思想家が唱えた儒教の古典著作を厳密に学ぶより、梅岩の「心学」は冥想や自己抑制や日常の仕事への専念によって悟りに至る道を示した。徂徠などの武士階級出身の思想家とは対照的に、彼は商業活動や利益追求を正当化し、江戸時代の社会秩序を認めながら商人階級に名誉ある地位を確立しようとした。「あなただけが、商売の利益を欲心の現われで道に背くと言ひ、商人を憎んで滅そうとしています。なぜ商人だけを賤しいものとして嫌うのですか。今すぐにも、商売の利益は払わないと言って利益を差し引いて支払えば、あなたは世の中の法則を破ることになるでしょう³⁵⁾」ということばで、梅岩は商業活動を弁明している。しかし彼には不当利益や無制限の暴利を正当化する意図はなく、むしろその倫理体系は正直に基づく利益を提唱する。「商人もそ

のように、本心から正直でなければ、他の人と並び立って通用することがむづかしい³⁶⁾。

4. 大貳の守業論

では、山県大貳は商人や商業について、どのように考えたか。まず、彼は古代中国の例にしたがって商人を「天民」の一部として認める。「古昔いはゆる天民なる者、その数四。いはく士、いはく農、いはく工、いはく商。(中略)商は善く貿易を為し、以て天下の財を通ず。この四者は、上天職を奉じ、下人事を済す。(中略)一日も相なかる可からざる者なり³⁷⁾」。つまり、政府は士農工商にそれぞれの本分に努めさせ、その四民は互いに必要不可欠な存在である。この大貳のことばによると、商人階級は元々憎むべきものではない。しかしそれは理想的な状態である。大貳の生きている時代の日本はその本来の状態から離れている。今は先王の「徳義の教へ」が全く絶えてしまったので、その四民が皆天職や本分から離れて道徳的に墮落し、商人も「利に黠し³⁸⁾」、つまり利益を追求し悪知恵をめぐらす。大商人の財産は計りきれないほど多いので、大名は彼らの前に頭を下げ、誤まったことに上下の順位を忘れて、「敬すること父兄の如し」つまり尊敬しすぎることによって、面目を失うということを大貳は非難する。

悪役人は農民から収穫の60、70パーセントの租税を取り、彼らは窮乏する。こうして農業への熱意は減退し、農業人口も減少する。このように「善く鬻ぐ者は富み、善く耕す者は餓う³⁹⁾」。問題は、商業の上手な者は富み、農業の上手な者は飢えるということである。役人は金銭を高く評価し、自分の利益しか考えず、正義を無視する。したがって、商人はお金の力で権力を得る。上にいる人だけではなく、職人や農民を奴隷のように扱うことができる。このように、農民が食糧などを生産することによって人民の生活を豊かにするという先王の原則は減びてしまった。「生を厚うするの道亡ぶ⁴⁰⁾」。

工業に従事する職人は器物を製造し、それによって人々の使用に役立てる。「天下の用を利する者なり⁴¹⁾」。しかし今は彼らは商人と利益を争うので、あまり利益をもたらさない丈夫で精密な製品を作るより、材料は粗悪で、製品はできが悪く、すぐにできるが、すぐに壊れる。したがって「用を利するの道壊る」。このように、古代に人間の秩序が作られたその原則である、先王が唱えた「利用厚生」、工業の人間が担当する「利用」と農業の人間が担当する「厚生」、の道が減びた。なぜなら幕府がそれらの問題に関する政策を欠いているからである、と大貳は断言する。「利用厚生」という『書経』のことばは大貳にとって理想的状態を言い表わす中心的概念である。それは春台が「治生の道」、つまり生活の道を立てるということに例えることばである。大貳は「利用厚生」の道を守るために、「守業」を唱え、人民はそれぞれの正業を守り土着すべきことが必要であるという。大貳は『柳子新論』の主人公である柳子に「守業」について次のように言わせる。

柳子いはく、それ民の業に居るや、父子相承け、世世変ぜず。各々その土に安んじ、各々その事を治むるは、先王の治なり。ここを以て上古の民は、能くその道を知って、その業に力む。食はこれを以て足り、器はこれを以て堅く、財はこれを以て通ず。これを用ふる者損な

く、これをなす者乏しからず⁴³⁾。

しかし今はこの理想的な状態が墮落した。俸給を多く貰うべき役人は、俸給が農民の収益に及ばない。それで、大貳は武士の困窮を訴える。商人は富裕であるが、祈祷師や医者や僧侶に及ばない。利欲にかられた人民は迷信におぼれて、祈祷師や僧侶の、利益追求に役立つ助言を求める。このように、それらの人は儲ける。富みの分配は全く逆の方向へ変わって、バランスが崩れた。人民は「利を逐うて走り、欲に随つて変ず⁴⁴⁾」、つまり利益を得るために頻繁に職業を変えるのである。「利を見て進み、害を見て退くは、衆人の情なり。即ち今の俗吏、何を以てか能く禁ぜん⁴⁵⁾」とあるように、大貳は人間の心や性格に関する幻想からさめた。利益追求が制御できなくなった、少なくとも当時の役人には制御能力がないのである。

人民は「一時の小利を見て、後患を慮らず⁴⁶⁾」、自分の正業を捨てて、自分の土地を去り都会に集まる。そこは過密状態となり大混乱に陥る。田畑は荒れ果てる。全ての人が暴利ばかりを貪り、「末を逐ひ利につとむるの徒のみ。その耕織して本を務むるの民に至りては、則ち掃然として聞ゆるなし⁴⁷⁾」。末というのは非生産的な職業、本は農作や機織のような生産的な職業を指すと思われる。この役立つ職業に務める人民は掃き払われたようにいなくなったと、大貳は四民の正業を守らず経済に損害を与える行動を非難する。

大貳は商人階級を根本的に軽蔑しているとは言えない。「商は天下の賤民なり。天下の賤民にして、天下の豪富に居り⁴⁸⁾」というように、商人は社会の最も低い階級である、したがって、現在のように彼らは最も富裕になって力を得たのは正当ではない。彼らに富裕や影響力は相応しくない。大貳にとって、士農工商という四民の序列は当たり前の事実である。それぞれの階級は自分の位置を守って正業を行なわなければならない。したがって商人はその最も低い地位に居りながら、社会に不可欠な、商人に相応しい活動をすれば、それで彼らが社会に役立つと大貳は考える。この意味で、彼は商人階級を排他的に軽蔑するのではない。商業を不可欠な活動として認めながら商人を高く評価しない立場は春台と一致している。

身分制度が崩れて、商人の地位や影響力が好ましからざる経済的・社会的状況によって高くなったということは商人の責任ではない。それは最終的に幕府にあると大貳は強調する。幕府のコントロールや政策が足りないから、経済活動や利益追求を導くべき道徳性が墮落し、商人は自分に相応しい任務を果たさなくなった、つまり財貨を流通させなくなった。悪い状況を改善できるのは下からではなく、上からである。人民ではなく、上に「英雄豪傑」や「忠信知勇の士⁴⁹⁾」が必要であり、つまり幕府のすぐれた人が着手すべきである。大貳は人民にこのような道徳的な能力を期待しないのである。しかし当時、権力を持つべき人間は権力を握ることができないから、その「傑然たる者」は行動を起こせないと、彼は非難する。

大貳が責任を社会の上層階級に求めた証拠は幾つかある。彼は当時の為政者を次のように、人民から税金などをしぼり取り、ただ自分の君主の富を増やそうとする連中として批判する。「今の政をなす者は、概ね皆聚斂附益の徒なり。その禍を蒙る者は、独り農を甚だしとなす⁵⁰⁾」。とりわけその災いに見舞われる犠牲者は農民であるという意見は大貳の、儒教思想に典型的な農民階級に対する好意的な姿勢を物語っている。その悪状況を乗り越えるために、大貳は次のように提案する。

若し能く循廉の吏を用ひ、農桑の利を奪ふことなくば、則ち天下食足らん。天下食足りて、しかる後民その業に安んずるなり。（中略）商賈の利を縦にすることなくば、則ち天下財足らん。天下の財足りて、しかる後士その職に安んずるなり。士安ければ則ち国強く、民安ければ則ち国富む。⁵¹⁾

もし農民を絞らない温良で潔白な役人を就ければ、それだけで食糧が足り、そして人民が自分の職業を守るようになる。それらの良い役人がいれば、商人は暴利をむさぼらなくなり、そして物資が十分あるようになる。したがって武士も人民も安心し、国は強くなり豊かになる。このような大武の論理は極めて単純素朴な思考である。彼は為政者の無限の力や権威を盲信していると思われる。平凡な人民の一人の人間としての能力が社会や経済の成り行きに積極的な好影響を及ぼすことができる、とか自分の力で道徳的に改良できる、などという考えを大武は持ち合わせていないようである。

5. 通 貨 論

商人の任務は善く貿易を行なうことによって貨を流通させることである。その「通貨」というテーマに大武は『柳子新論』の第11巻をついやす。「貨」はどのようなものを指すのか。貨物という意味の財産だけであるのか、貨物と貨幣の両方を意味するのか。春台の『経済録』によると、「貨は、貨財也、宝貨也」⁵²⁾、つまり、貨は繊維製品、茶、酒、たきぎ、竹などの貨物だけではなく、金・銀・銅の銭、貨幣でもある。春台は貨幣の種類を詳しく説明するが、大武は銭そのものについてほとんど触れない。したがって、『柳子新論』の中では「通貨」はおおむね貨幣ではなく、貨物や財物を通ずること、流通させることを指すと思われる。大武の考え方には春台の場合より、純粋な「貴穀賤金」がはたらいっていると言えよう。彼は柳子に通貨について次のように言わせる。

食を足すの道は、農事を勤むるより先なるはなく、貨を通ずるの計は、物価を平かにするより先なるはなし。税斂を厚うせざれば則ち農勤み、商利を縦にせざれば則ち価平かなり。⁵³⁾

つまり租税を多くせず、そのことによって農業を奨励すれば、食糧が足りる。そして貨を流通させる政策には、商業の利益追求を放任せず、そのことによって物価を平定し、標準価をきめることが最も急務である。

しかしそのバランスは今や崩れている。大武は食糧や貨幣の量と価格の関係について次のような考察を展開する。ある客が、財貨の流通や食糧を充実させる方法に関する柳子の教を聞いて質問をした。物価が高いか安いこととは必ずしもその物が多いか少ないかによらないようである。昔は米が一石で二両であったが、それは高いとは言えなかった。しかし今は米価は半値以下であるのに、飢える人は倍になったのは何故なのか。柳子は答える。

それ食貨の軒輊あるは、猶ほ權と衡とのごときか。多ければ則ち賤く、寡ければ則ち貴きは、理の必ず所なり。しかも且つこれに反するは、そもそもまた説あり。今、年穀の登らざるは、将に古に倍せんとす。ここを以て死者乱麻の如く、而して銭貨の通ぜざる、また且つ古に三

倍す。則ち食の足らずといへども、その数実に貨よりも多し。これ物重くして権軽きの然らしむるに非ずや。⁵⁴⁾

物価は、物の量が多ければ下がり、少なければ上がるのが当然である。今その反対の現象が見られるが、それには次のような説明がある。今では穀物の収穫は昔の半分以下であり、したがって飢えて死ぬ人がごろごろしている。しかし貨幣の流通量は昔の三分の一に過ぎない。食糧の量は貨幣の量より多いにもかかわらず、食糧も足りない。それをはかりに例えれば、物が重くて分銅が軽い所為ではないか。つまり、食糧と貨幣とがつりあっていない。現実存在している食糧を流通させるには、貨幣の量が足りない。したがって人民は困窮に陥っている。はっきりとではないが、間接的に大貳はこのように白石と同様に、貨幣の流通量を増加させる必要性を訴えているのである。

「通貨第十一」の最初に述べた「食を足すの道」と「貨を通ずるの計」は共に阻害されている。前者は、古代中国の夏・殷・周王朝時代にはほぼ10%であったのに対して、当時の日本の租税は50、60%が農民から絞り取られ、さらに他の貢ぎ物も納めさせられるからである。「邦国の租、或は什に五六を収め、加ふるに調と庸とを以てす」。⁵⁵⁾したがって、農民はあきらめて農作をなござりにし、穀物が不足する。

大貳は農民に対する租税制度を暗に批判する。彼は肥沃な土地や不毛の土地について考えをめぐらす。なぜ昔の人は、瘦地は肥えた地より価値があると言ったかということ、それは収穫の多い土地に限って、租税が一方的に増えるからである。当時も全くこのような状況になって、田地を買う人は良い田地を求めず悪い田地だけを選ぶ。そして良い田地は荒れ放題になり、したがって「食を足す」ことはできなくなる。田地のよしあしは、本来収穫の多寡によるが、今はその反対である。このように、大貳は間接的に新しく開拓された耕作地に対する幕府の税政策を非難していると思われる。幕府は耕作を振興するための手段として開拓地や辺鄙な不毛の耕作地の租税を軽減していた。そのために、農民はこのような収穫の少ない田地を優先する。その窮状を打開するために大貳は次のように提案する。

若し今その溝洫を更正し、上下の等を改定し、因つて数歳の入を計り、以て租調の法となし、計吏をして、私智を逞しうするを得ざらしめば、則ち民業必ず安く、而して農事必ず挙らん。これその食を足し財を通ずるの道のみ。⁵⁶⁾

つまり、田地の区画である用水路の位置を修正し、田地の質の等級を改定し、数年間の収穫の統計をとる必要がある。それによって租税徴収の方法を新しくすべきである。税金係りの役人をコントロールすれば、農民が取られる税金は適切になり、農業が安定し、食糧が足りるようになると、大貳は強調する。それはある程度、具体的で現実的な提案である。しかし食糧が足りるという目標に実際に到達するかどうか、は未解決の問題として残る。

「貨を通ずるの計」が何故阻害されているかについて、大貳は次のように論じる。商人は「価賤しければ則ち居き、価貴ければ則ち廃し、廃居己にあり」⁵⁷⁾、値段が安いときに物をたくわえておいたり、高いときに売ったりするのを自分勝手に決める。錦織や刀のつばを、武士が自分の俸給で一生買えないぐらい、物価は不当に高い。このように、奢侈品は商人しか所有できない。困

窮している士農工の人は皆、商人から借金をする。しかしその一年間の利息は「一歳の息、或はその母に倍蓰⁵⁸⁾」つまり元金の二倍にも五倍にもなることがある、と大武は高利を非難する。商人は貨幣を好み穀物を卑しめ、金銭や財貨や米を蓄積するが、その米を「窮民一朝の食に給せず⁵⁹⁾」飢えて死にそうな人に与えるより、むしろ倉庫に蓄えて腐敗させると、大武は商人の行動を批判する。改良策として、彼は次の助言をする：

何んぞその官を建て、その法を立て、これをして農と共に食ひ、工と与に居らしめ、凡百の玩好、一切これを禁じ、（中略）従はざる者はこれを刑し、改めざる者はこれを罰せざる。これを売る者多く、而してこれを買ふ者少ければ、則ち居く所の者は必ず廢し、聚むる所の者は必ず散ず。散ずる者多ければ則ち售れず、售れざれば則ち必ずその価を減ぜん。而して後（中略）能くその精粗を明かにし、利多き者はこれを征し、蓄多き者はこれを賦す。かくの如くなれば則ち物価自ら平かにして、貨財自ら通ぜん⁶⁰⁾。

つまり、商人の活動をコントロールするために、官制や法律を立てなければならない。さらに彼らの衣食住の程度は農民や職人と同じくし、贅沢な趣味道楽品を禁止する必要がある。売る人が多くて買う人が少なければ、在庫の貯蔵品は世の中に出回り、出回る物資が多ければ、売れなくなる。売れなくなれば、値段が安くなる。従って質のいい物と質の悪い物を区別できるようになる。利益を多く取る人や多くの物を蓄える人には租税をかける。このようにすれば、物価は自動的に安定し、財貨は流通するようになる、と大武は論じる。彼は明らかに商業を促進すればよいと考えていながら、公の支配の下での商業競争を支持するのである。興味深いことに大武は、白石が貨幣の価値・流通量や物価の間の関係を論証したようには貨幣の価値・流通量を考察せず、問題の解決策を提示するが、いずれも表面的なものに止まった。例えばどのように、在庫の貯蔵品が世の中に出回るようになるか、という問いには答えがない。

大武は「食」（「食を足すの道」）と「貨」（「貨を通ずるの計」）を関連づけて考察した。それには太宰春台の『経済録』の影響があると考えられる。『経済録』の巻第五は「食貨」と題されている。「食貨」を漢和辞典で引けば「転じて、経済をいう」とある。『経済録』第五巻の「食貨」は、政治の対象のうち最も重要な事柄（これは古代中国の『書経』の「洪範」では「八政」の第一と第二に当たり、「食」は食物、「貨」は貨物、貨幣）として具体的に論じているものである。『柳子新論』の中でも、この二つは国を無事に治めるための大切な要素とされている。

おわりに

山県大武は経済ということばを使わない。その代わりに「食を足す」、「通貨」や「利用厚生」などということばでパラフレーズする。その説明は簡単だと思われる。何故なら、『柳子新論』の跋によると、家の庭を掘った時に石函が出てきて、その中に『柳子新論』という書物があったというが、それは口実にすぎなかった。大武はこのようにその書物は自著ではなく、他の著者が「織田氏の時に⁶²⁾」、つまり織田信長の時代に書いたと称している。このカムフラージュがばれないよう、大武は「経済」という、春台が1729年に『経済録』の中で定義したばかりの（織田時代よ

りもっと新しい）ことばを避けたと言えよう。

同じ理由から、大弐は当時の問題の根源を究明することができなかった。あまりにも細かく当時の緊急の事情について論じたとしたら、そのカムフラージュがすぐに明らかになって、大弐の幕府に対する批判的な立場はさらに彼を危険にさらしたと思われる。このために、大弐が時々問題の表面に止まるのは不思議ではない。それにしても、かなり細かく例えば武士の困窮、米の値段などについて指摘しているので、カムフラージュを見破るのは難しいことではなかったに違いない。

ここでは大弐の経済に関する思想の全てを紹介することはできず、これからの研究のテーマとすべきものが多く残されている。例えば彼の「編民」の考えについて触れることができなかった。これは戸籍制度を正しくして人民を土着させ、浮浪の民をなくすべきことを説いたものである。

ここで述べた大弐の経済思想をまとめてみれば、復古主義的傾向が強いと言える。彼は先王時代の状況を理想として掲げ、日本はその理想状態へ戻らなければならない、と主張する。大弐はこの意味では現実主義者とは正反対の、空想家であった。しかし彼が状況の改善のために提案した行政改革、つまり有能な役人の幕府の要職への抜擢、行政機関の新設や法の整備などは非常識とは言えない。

しかし大弐は、同時代人であったアダム・スミスと違って、経済の発展過程を省察しなかった。ただ昔と当時の状況を比較したにすぎない。そもそも彼は経済事情の変化が発展する過程であるということ意識しなかったにちがいない。しかもその上、経済は進歩すべきであるという考えも一切ない。たどりつくべき目的はいまだかつてなかった理想状態ではなく、前例のある社会的・経済的・道徳的秩序にすぎない。これでは、日本の経済思想家たちは、同時代の西洋の経済思想家たちのように、全ての人が裕福に暮らすことを経済成長の望ましい目標として理解したかどうかという疑問が出てくるのは当然である。確かにこのような傾向はなかったと言えよう。

大弐の思考の進め方は春台や白石のように分析的ではなかった。しかし彼の目的は経済状況や経済的機能の分析ではなく、当時の社会の苦境や政府の無力を非難しながら、幕府を批判することにすぎなかった。白石のように貨幣経済の改善などという細かい分野に関する改革を目指さなかったのである。大弐は経済状況の改善だけではなく、人民の道徳を含む社会全体の改善を望んだ。

このような全体的な考え方は大弐が悪い状況の原因を究明する場合にも明らかになる。経済状態の悪化には経済的メカニズムに関する理由しかないという考えではなく、徂徠のように人間の道徳性をも非難しながら、当時の経済状況を把握した。例えば何故「通貨」が妨げられているかというところ、大弐は五つの弊害を取り上げる。それは(1)官職にある者は利益ばかりを考えて、廉恥心を無くしたこと。(2)官を売る習慣。(3)忠信の士がいなくなり、賄賂の習慣が広がったこと。(4)日和見主義。(5)過分の贅沢⁶³⁾。このように、大弐は人間の行動に経済問題の責任を負わせる。

大弐の経済に関する提案をまとめて言えば、すぐれた役人が幕府のために働く必要があるということである。それらの役人には二つの任務がある。一つは、租税制度の改新によって農業を奨励し、食糧が十分にあるようにすること。もう一つは、商人の貪欲な利益追求を制限し、物価を安定させ、これによって財貨を流通させることである。それは徂徠の経済観にはたらいっている「重農抑商」思想を思い浮かばせる。彼は「商人ノ潰ル、事ヲバ、カツテ構フマジキ也」という

ことばで商人に対する激しい憎悪を見せ、彼の理想社会では武士と農民だけが道徳性をもつ⁶⁵⁾。徂徠も大武も武士と百姓を中心とする社会を考えていると言えよう。徂徠は商人を潰してほしいなどと大武以上に感情的表現を使うが、二人とも商人には、財貨を流通させる仕事をするために、社会の周辺の位置を認めているにすぎないと言える。

この農業を重視する態度はケネーなどフランス18世紀後半のフィジオクラートの思想に近い。その経済学者のグループは農民を最も重要な階級（生産的階級）、地主を第二階級（有産階級）、商人・職人を第三階級（非生産的階級）とみなした。スミスの思想と並べて観察すれば、スミスは重商主義を批判したが、フィジオクラートよりもっと広く国富の源泉を労働一般に求めた。

欠乏は人間の本来の状態であるとスミスは18世紀に指摘した。まず生き延びるために、そして裕福に暮らすために、人間はその欠乏に対して戦わなければならない。欠乏の原因は自然にある。何故なら、自然は人間に敵対する存在であり、しかもその資源には限界があるからである。人間はその自然を労働によって、征服すべきである。二世紀後のケインズの考えでは、欠乏を克服すれば、人間は伝統的な価値、つまり道徳性へ戻ることができる。この西洋の経済学者と違って、大武の思想は簡単に次のようにまとめられよう。人間の本来の状態は「禽獣と以て異なるなし⁶⁶⁾」、鳥獣のような、道徳性なしの状態であった。物質的欠乏ではなく、道徳的欠乏であった。道徳性がなければ、物質的欠乏、例えば食糧不足が発生する。乗越えるべき敵は自然ではなく、道徳の墮落である。それを克服すれば、物質的欠乏も克服できるのである。

東洋と西洋の経済思想を比較する際、このような、物質的状況と道徳的状況の逆の相互作用を考慮しなければならない。その比較をさらに深める課題は他日に期したい。

注

- 1) 「山県大武の社会観について」、『立命館大学人文科学研究所紀要』1993. 10., No. 59.
- 2) 川口浩『江戸時代の経済思想——「経済主体」の生成——』、勁草出版、1992年、9頁。
- 3) 丸山眞男『日本政治思想史研究』、東京大学出版会、1987年、279頁。
- 4) 同上、281頁。
- 5) 林基「宝暦——天明期の社会情勢」（岩波講座『日本歴史』12、近世4、岩波書店、1963年）128頁。
- 6) 市井三郎『近世革新思想の系譜』、日本放送出版協会、1980年、104-118頁。
- 7) Najita, Tetsuo: Restorationism in the Political Thought of Yamagata Daini, in: Journal of Asian Studies 31, 1, Nov. 1971, pp 17-30.
- 8) Wakabayashi, Bob Tadashi: Japanese Loyalty Reconstructed, Yamagata Daini's Ryushi Shinron of 1759, University of Hawai'i Press 1995.
- 9) 荻生徂徠『太平策』（『日本思想大系』36、岩波書店、1973年）475頁。
- 10) 田原嗣郎『徳川思想史研究』、未来社、1992年、294-297頁。
- 11) Hall, John W.: Das Japanische Kaiserreich, Frankfurt a. M. 1968, p. 198.
- 12) テッサ・モーリスー鈴木『日本の経済思想』（藤井隆至訳）、岩波書店、1991年、8頁。
- 13) 新村出編『広辞苑』第三版、岩波書店1991年、732頁。
- 14) 太宰春台『経済録』（『日本哲学思想全書』第十八巻、政治・経済、経済篇、平凡社1957年）25頁。
- 15) テッサ・モーリスー鈴木、22頁。
- 16) 同上、29頁。
- 17) 熊澤蕃山『集義和書』（『日本思想大系』30、岩波書店、1971年）249頁。
- 18) 熊澤蕃山『集義外書』（『日本の名著』11、中央公論社、1976年）402頁。

- 19) テッサ・モーリスー鈴木, 34頁。
- 20) 川口浩, 199頁。
- 21) 荻生徂徠『政談』（『日本思想大系』36, 岩波書店, 1973年）305頁。
- 22) 川口浩, 194頁。
- 23) テッサ・モーリスー鈴木, 34頁。
- 24) 新井白石『建議』（『新井白石全集』6, 国書刊行会, 1977年）191-192頁。
- 25) Sansom, George: A History of Japan, Vol. 3, 1615-1867, Tuttle 1987, p. 140.
- 26) テッサ・モーリスー鈴木, 39-40頁。
- 27) 荻生徂徠『政談』, 333頁。
- 28) 太宰春台『経済録』, 71頁。
- 29) 同上, 37頁。
- 30) 同上, 41頁。
- 31) 川口によると, その三人は町人として, 同一グループに属する人物である。川口浩, 318頁。
- 32) 同上, 260-61頁。
- 33) 同上, 283頁より引用。
- 34) Bellah, Robert: Tokugawa Religion, New York 1985, p. 133.
- 35) 石田梅岩『都鄙問答』（『日本の名著』18, 中央公論社, 1972年）226頁。
- 36) 同上, 225頁。
- 37) 山県大弼『柳子新論』, 川浦玄智訳注, 岩波文庫, 1943年, 40頁。
- 38) 同上, 42頁。
- 39) 同上, 43頁。
- 40) 同上, 43頁。
- 41) 同上, 44頁。
- 42) 太宰春台『経済録』, 38頁。『尚書』, 「大禹謨」（Legge, James: The Chinese Classics, Vol. 3, The Shoo King, Taipei 1991）56頁。
- 43) 『柳子新論』, 58頁。
- 44) 同上, 59頁。
- 45) 同上, 59頁。
- 46) 同上, 61頁。
- 47) 同上, 60頁。
- 48) 同上, 65頁。
- 49) 同上, 79頁。
- 50) 同上, 57頁。
- 51) 同上, 58頁。
- 52) 太宰春台『経済録』, 37頁。
- 53) 『柳子新論』, 62頁。
- 54) 同上, 69頁。
- 55) 同上, 63頁。
- 56) 同上, 66-67頁。
- 57) 同上, 63頁。
- 58) 同上, 64頁。
- 59) 同上, 70頁。
- 60) 同上, 65頁。
- 61) その類似を指摘したのは例えば今中寛司（「柳子新論とその思想史的系列について」, 『文化史学』15, 1960年, 50-63頁）, 50頁。

- 62) 『柳子新論』, 81頁。
- 63) 同上, 67-68頁。
- 64) 荻生徂徠『政談』, 345頁。
- 65) 川口浩, 162頁。田原嗣郎, 294頁。
- 66) 『柳子新論』, 23頁。